

挨拶

林 哲 介（京都大学副学長／京都大学高等教育研究開発推進センター長）

（林） 高等教育研究開発推進センターのセンター長をしております林です。先ほど尾池先生からわざわざ私のことをご紹介いただき、いささか恥ずかしい思いをしております。今日は私が定年退職であるということは伏せておいてお話をしようと思っていたのですが、そうはいかなくなってしまいました。

第12回の大学教育研究フォーラムということで、毎年のことでございますけれども、今回も全国の大学から500名を超える教職員のかたがたにお集まりいただきまして、ありがたいと思っております。

今回のシンポジウムは「FDの新たな組織化を目指して」という表題になっておりますが、その前に、今ご紹介いただきましたように、井村先生から「日本の高等教育の課題」というお話を頂きます。このことと後のシンポジウムがどのように結びつくのかについてはもちろん議論を聞いていただかなければならないわけですが、ちょっと私自身の感想を申し上げますと、日本でFD（ファカルティ・ディベロップメント）という言葉が使われるようになって恐らく15年ぐらいになるのではないかと思います、最近になってFDという言葉自体がいささか古めかしいというか、少し時代物のような印象を持つようになってきております。それだけに、日本の高等教育が現在抱えている課題との関係で、これまでFDと呼んできたもの、教員を中心にした教育活動のあり方がどの方向にどう向かわなければならないかということをつかみ出すことが、今回のシンポジウムの一つの目的ではないかと考えております。

今日、ここで話題提供をしていただく先生がたのお話は一つ材料でありまして、それぞれの大学で多様に展開されるようになった組織的な取り組みの中で先生がたのお感じになっていること、問題点とお考えになっていること、あるいは今後こんなふうに進むべきではないかとお考えになっていることなどを積極的に出し合っていて、今後の参考になる意味を持ったシンポジウムになりますようお願いして、主催者を代表してのごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします（拍手）。

（大塚） 林先生、ありがとうございます。

（大塚） それでは、早速、特別講演に入りたいと思います。井村裕夫先生はご紹介するまでもないと思いますが、一応簡単に略歴等をご紹介させていただきます。井村先生は京都大学の医学部で教授となられて、1991年に京大の総長になられています。その後、1997年に退任されまして、総合科学技術会議の議員として大学審議会、中央教育審議会をはじめ、高等教育を中心とした要職についておられます。

それから、総合科学技術会議議員という名前にぴったりするという意味でいえば、昨年の秋に『21世紀を支える科学と教育』というご著書を出されておまして、日本の科学技術や大学教育についてリーダー的な発言をどんどんされて、我々大学にかかわる者を引っ張ってくださっています。

今の所属を特定するのは難しいのですが、中央教育審議会の名簿では、先端医療振興財団理事長、稲盛財団会長、科学技術振興機構顧問等々を併任されていらっしゃいます。また、今日の午前中の小講演では大学評価を扱いましたセッションが超満員になりましてびっくりしましたが、井村先生は、大学評価・学位授与機構の評議員会の会長として、今の大学評価の進展を高所大所から見守ってくださっています。

今日は、21世紀が始まって間もないこの時期に、私ども大学人に今後の方向性をお示しいただきたく、「日本の高等教育の課題」という、敢えて大きなタイトルでお話をお願いいたしました。井村先生、よろしくお願いいたします（拍手）。